

非ヒト動物の痛みをめぐる ——不在性論証と不可知性論証の検討——

佐々木健人

概要

There is an ongoing debate among theorists about whether non-human animals, such as fish, feel pain. Some proponents argue that fish can experience pain, while critics challenge this view. In this paper, we examine these criticisms by formulating them into two arguments and analyzing their implications. The first argument against the idea that fish feel pain is the absence argument, which asserts that we cannot attribute pain experiences to fish. Proponents of fish pain often counter this claim by appealing to the principle of multiple realizability, suggesting that pain can be realized in different ways across species. If this principle holds, proponents of fish pain may be justified in endorsing the idea that fish experience pain. However, they then face the second argument, the agnostic argument, which maintains that, in principle, it is unknowable whether we can attribute pain experiences to fish. As a result, proponents of fish pain encounter significant challenges when attempting to establish that fish experience conscious pain. Nevertheless, a deeper analysis reveals that advocates of these criticisms face difficulties of their own. These theorists are confronted with a dilemma: either they cannot accept the possibility of attributing pain experiences to all non-human animals, or they risk becoming entangled in the same agnostic argument they direct at proponents of fish pain. In conclusion, this paper argues that the objections to fish pain present significant challenges for both proponents and critics alike. Therefore, further discussion is necessary regarding the nature of animal pain.

Keywords: 心の哲学、現象的意識、動物意識

1 導入

ある日浜辺を散歩していると、一人の釣り人を見かけた。遠巻きに眺めていると、釣り人は一匹のサカナを釣り上げた。釣り上げられたサカナは、上顎に刺さった釣り針を何とかしようと、空中でもがいている。あのサカナは今、針に刺された痛みを感じていると考えられるだろうか。言い換えると、あのサカナは今、私たちが針に刺された時と同じような痛みの「意識経験」を持っていると考えられるのだろうか。

ある論者は、この問いに肯定的に答える (e.g. Dunlop et al. 2006, Sneddon et al. 2003)。その根拠(の少なくとも一部)は、サカナ^{*1}が痛みを感じているかのような行動をとることである。例えば Sneddon et al. (2003) が示したように、サカナは侵害受容器を持ち、侵害刺激に応じてその生理的・行動的応答を変化させる。また Dunlop et al. (2006) が示したように、サカナは侵害刺激を学習し、その後の回避行動を変化させることができる。彼女らの見解に則るならば、これらの事実は、サカナが痛みの意識経験(以下、単に「痛み」と呼ぶ)を持つという考えを支持する。このように、サカナへの痛みの帰属を支持する論者を、以下では「サカナ意識論者」と呼ぼう。

このようなサカナ意識論者の主張に対して、いくつかの批判が存在している (e.g. Key 2016, Rose 2002)。その批判の根拠(の少なくとも一部)は、サカナへの痛みの帰属を否定するだけの理由が存在することである。例えば Key (2016) の考えに則るならば、その理由とは新皮質の不在である。つまり、新皮質を持たない以上、サカナの侵害受容は——例えばヒト動物の脊髄反射がそうであるように——意識経験を伴わないままに駆動していると考えべきなのである。よって彼の考えでは、痛みを感じているかのような行動をサカナがとることは、サカナへの痛みの帰属を支持しない。

本論では、サカナ意識論者に対する批判の一般的な形式を取り出し、それを「反サカナ意識論証」として定式化する。反サカナ意識論証には少なくとも、サカナに痛みを帰属することはできないとする議論と、サカナに痛みを帰属できるかどうかは不可知だとする議論の二種類がある。そして私の分析では、これらが組み合わせることで、サカナ意識論者は困難を抱えることになる。

本論の目的は、反サカナ意識論証の構造とその帰結を中立的観点から分析することである。このような分析を通して本論では、(1) 反サカナ意識論証がサカナ意識論者の困難を確かに示していること、(2) さらに分析を進めると、反サカナ意識論証の支持者の困難もまた明らかになることを主張する。つまり、反サカナ意識論証は、サカナ意識論者に加えて、この論証の支持者——すなわち、サカナ意識論者を批判する論者——に対してもまた困難を提示しているのである。私の考えでは、これらの論者は、この困難に取り組むことで、自身の主張をより明確化させることができる。よって反サカナ意識論証は、サカナ意識論者にとっても、さらにはこの論証の支持者にとっても、より真剣に考慮すべきものであろう。

本論は以下のように進行する。第1. 1節でいくつかの前提を確認した後、第2章では二つの反サカナ意識論証を定式化する。まず第2. 1節では、第一の反サカナ意識論証を定式化する。これによると、サカ

^{*1} 本論では、「サカナ」という名称を、トラウトやサーモンなどの「硬骨魚類」を指すものとして使用する。というのも、既存の議論の多くは硬骨魚類に関するものだからである。

ナに痛みを帰属することはできない。なぜなら、痛みの帰属のために必要だと考えられる新皮質を持たないからである。その後の第2.2節では、この論証に対する標準的な反論を確認する。その反論によると、痛みは新皮質以外の神経構造によっても実現可能であるため、サカナもまた痛みを帰属されうる。しかし第2.3節で論じるように、この反論に訴える論者は、もう一つの反サカナ意識論証に直面する。その論証によると、サカナに痛みを帰属できるかどうかについて、私たちは原理的に不可知である。そして私の考えでは、従来なされてきた二つの反サカナ意識論証を組み合わせることで、サカナ意識論者のジレンマが明らかになる。

続いて第3章では、反サカナ意識論証の支持者が行う議論に対するさらなる吟味を行う。その結果として私は次のことを指摘する。すなわち、反サカナ意識論証は、その支持者に対してもまた困難をもたらすことになる、と。私の分析では、この論証の支持者は、いかなる非ヒト動物の痛みも認められないか、あるいは不可知性論証に直面するかというジレンマに陥ってしまう。

これらの議論をまとめ、第4章では、反サカナ意識論証が、サカナ意識論者とこの論証の支持者の双方に困難をもたらすと主張する。これらの論者は、この困難に取り組むことで、自身の主張をより明確化させることができるだろう。最後に結論を述べる。

1.1 前提

議論を始める前に、いくつかの前提を確認する。

第一に用語法に関して、本論で取り上げる「意識」あるいは「意識経験」とは、「現象的意識」のことである。意識経験は一般的に、その経験が持つ独特の主観的感じである「現象的性質」——いわゆる「クオリア」——によって定義されている。例えば、痛みの意識経験を持つ（あるいは痛みを感じる）とはつまり、痛みの状態にあるときに特有の何らかの感じがあるということであり、この意識経験は、その独特な現象的痛さによってまさにその痛みとして定義されている。また以下では簡略化のため、非ヒト動物の意識を「動物意識」、サカナの意識を「サカナ意識」、ヒト動物の意識を「ヒト意識」と呼ぶ。

第二に本論の主題に関して、本論で焦点を当てるのは、サカナの痛みに関する科学哲学レベルでの対立であり、つまり、ある経験的知見がサカナへの痛みの帰属を支持するものとして解釈されうるかどうかという対立である。例えば導入で見たように（そして第2章以降でより詳しく見るように）サカナ意識論者は、一方で、サカナが痛みを感じているかのような行動を示すことを、サカナが痛みを持つとみなすための証拠として解釈し、他方で、サカナが新皮質を持たないことを、サカナが痛みを持たないとみなすための証拠として解釈しない。これに対して反サカナ意識論証においては、一方で、サカナが痛みを感じているかのような行動を示すことは、サカナが痛みを持つとみなすための証拠として解釈されず、他方で、サカナが新皮質を持たないことは、サカナが痛みを持たないとみなすための証拠として解釈される。本論では、このような科学哲学レベルでの対立に焦点を当てる。よって、サカナの痛みに関する経験的知見そのものについて本論で詳細に論じることはない。

第三に、本論では、サカナへの痛みの帰属を支持する議論ではなく、それに反対する議論に焦点を当てる。なぜなら、Key (2016) に対する大量の反論が示唆しているように、サカナの意識経験を疑うような

議論はしばしば「選択的で、短絡的で、不当で、前時代的な」ものと見なされてしまうからである (Brown 2016: 1)。私の考えでは、反サカナ意識論証は、サカナ意識論者が取り組むべき課題を確かに示している。加えて、本論での分析が正しいならば、反サカナ意識論証はその支持者に対してもまた課題を提示している。したがって、最終的に本論で論じるように、反サカナ意識論証は、多くの論者にとってより真剣に考慮すべきものである。

第四に、本論では特にサカナが持つ痛みについて議論を行うが、その理由は、サカナが痛みについて対立がある非ヒト動物の代表例だからである。近年の議論では、例えば哺乳類が痛みを持つことはほぼ自明視されている (cf. Browning & Birch 2022, sect. 2)。というのもこれらの動物は、新皮質のような、非常に発達した脳構造を持っているからである。しかし、サカナの痛みに関しては、すでに見たような対立が存在している。なぜならサカナは、哺乳類ほど発達した脳構造を持っておらず、とりわけ新皮質を持っていないからである。

サカナに限らず、多くの非ヒト動物に関して、その痛みをめぐる議論が生じている。例えば、鳥類や、タコをはじめとした頭足類に関しては、批判はあるものの (e.g. Key & Brown 2018)、その発達した脳構造を理由として、痛みの存在がおおむね受け入れられている (cf. Browning & Birch 2022, sect. 2)。しかし、脳がそれほど発達していない昆虫に関しては、その痛みを支持する論者はいるものの (e.g. Barron & Klein 2016)、サカナのケースと同様に批判が存在している (e.g. Key, Arlinghaus, & Browman 2016)^{*2}。

痛みについて論争がある非ヒト動物の中でも、サカナは、現在盛んに議論がなされている動物の一種である (cf. Browning & Birch 2022, sect. 2)。よって本論では、サカナの痛みをめぐる議論に焦点を当てる。ただし、サカナの痛みをめぐる本論の議論は、他の非ヒト動物の痛みに関しても含意を持ちうるだろう。

第五に、本論では、議論の見通しをよくするために、既存の議論に倣って次のように仮定する。すなわち、ある非ヒト動物に意識経験を帰属することが合理的であるのは、その動物の意識経験を支持するだけの証拠があり、かつその帰属を阻むような「阻却子 (defeater)」が存在しない場合かつその場合のみである、と (Birch 2022, Michel 2019, cf. Tye 2017)。例えば、痛みを感じているかのような行動(以下、「痛み様行動」と呼ぶ)をある存在者が示すことは、その存在者に痛みの意識経験を帰属するための理由となるだろう。しかし、そのような帰属が合理的であるのは、その帰属に対する阻却子が存在しない場合のみである。

例えば Michel (2019) に倣って、次のようなロボットを想像してみよう。すなわち、侵害刺激を感知したとき、叫び声のような音声を出し、刺激部分を保護し、かつ逃避行動をとるというプログラムだけを実装されたロボットを。このロボットは確かに痛み様行動を示している。しかしある論者は、このロボットに痛みの意識経験を帰属することは合理的ではないと考えることができる。なぜなら、そのような帰属に対する阻却子が存在しうるからである。例えばある論者は、次のように考えることができる。すなわち、このロボットは、

^{*2} このような対立は時として、植物の意識 (e.g. Segundo-Ortin & Calvo 2023) や原核生物の意識 (Baluška & Reber 2019) についても生じる。

意識のために必要だと考えられるような最低限の認知能力——一般的な動物では脳によってもたらされるもの——を持っていない、と。つまり、最低限の認知能力の欠如を、このロボットへの意識経験の帰属に対する阻却子として理解することができるのである^{*3}。このような仕方では、本論では、阻却子が存在する場合には、その存在者への意識の帰属は合理的でないと考えられる。

最後に、本論での反サカナ意識論証は、サカナ（あるいは他の非ヒト動物）への道徳的配慮に関する直接的含意を持つものとして想定されてはいない。確かに、非ヒト動物への痛みの帰属を支持する主張はしばしば、その動物の福利への配慮が必要であるという道徳的主張を伴っている (e.g. Sneddon 2011, Jones 2013)。しかし、ある動物が痛みを持ちうることは、その動物が道徳的配慮に値することを即座に含意するわけではない。実際、意識経験（痛みを含む）の能力と道徳的地位とのつながりに対して、動物福利論の観点 (Dawkins 2021) や、意識の存在論の観点 (Kammerer 2022) からの批判が存在している。したがって、反サカナ意識論証がサカナへの道徳的配慮に関する含意を持つためには、さらなる議論が必要である。本論では、道徳的配慮に関するそのような議論は行わない。

以上が本論の前提である。次章では、本論の主題である二つの反サカナ意識論証を定式化する。

2 反サカナ意識論証

第2章では二つの反サカナ意識論証を定式化する。第2.1節では、第一の論証である「不在性論証」を定式化する。この論証によると、サカナは痛みを持ちえない。なぜなら、痛みのために必要だと考えられる新皮質を持たないからである。第2.2節では、この論証に対する標準的な反論を示す。その反論によると、痛みは新皮質以外の神経構造によっても実現可能であるため、サカナもまた痛みを持ちうる。しかし第2.3節で論じるように、この反論に訴える論者は、第二の反サカナ意識論証に直面する。その論証によると、サカナが痛みを持つかどうかを知ることは原理的に困難である。そして私の考えでは、従来なされてきた二つの反サカナ意識論証を組み合わせることで、サカナ意識論証のジレンマが明らかになる。

2.1 不在性論証

既に見たように、サカナは痛み様行動を示す。例えば、サカナは侵害受容器を持ち、侵害刺激に対する反応や、侵害刺激の学習が可能である (cf. Sneddon et al. 2003, Dunlop et al. 2006)。このような行動は、サカナに痛みを帰属するための理由となるだろう。つまり、サカナが示す痛み様行動は、サカナが痛みを持っているという推論を支持すると考えられるのである。

しかし、そのような推論が合理的であるのは、それに対する阻却子が存在しない場合のみである。そして、サカナの痛みに関しては阻却子が存在している。それはつまり、サカナが脳新皮質を持たないことである。このような議論は Rose (2002) や Key (2016) が行っているものであり、Dinets (2016) や Michel

^{*3} このロボットのケースは、あくまで阻却子の働きを示すための例である。本論では、最低限の認知能力の欠如が阻却子であることを前提してはいない。

(2019) が「No cortex, no cry 論証」と呼んだものである*4。この論証は以下のようにまとめることができる。

No cortex, no cry 論証

- (1) X が新皮質を持つことは、X に痛みを帰属するための必要条件である。
- (2) サカナは新皮質を持たない。
- (3) したがって、サカナに痛みを帰属することはできない。

(1)が示しているのはつまり、新皮質を持つことは、その存在者が痛みを感じると合理的にみなされるための必要条件だということである。正確に言うと、Rose (2002) や Key (2016) 自身の議論では、新皮質やその一部分——前頭前皮質、前帯状皮質、一次体性感覚野と二次体性感覚野、島皮質など (Key 2016: 4)——は、ヒト動物の痛みと相関することを理由に、痛みを感じるための必要条件だとされている。しかし、新皮質を持つことはむしろ、X が痛みを感じるとみなされるための必要条件として理解されるべきであろう。というのも、新皮質が痛みと相関することは、新皮質以外の神経構造もまた痛みの意識経験を生じさせる可能性を排除しないからである。よって(1)は、X が痛みを感じるとみなされるための必要条件として、新皮質を提案していることになる。

しかし、サカナは新皮質(少なくとも、哺乳類のように著しく発達したもの)を持たない。というのも、新皮質は哺乳類に特有の脳構造だからである。このことは、(1)と組み合わせることによって、サカナへの痛みの帰属に対する阻却子を構成する。つまり、痛みを持つとみなされるためには新皮質が必要であるにもかかわらず、サカナは新皮質を持たないため、サカナに痛みを帰属することは合理的でないのである。

ただし、痛みを感じるとみなされるための正確な必要条件については、さらなる議論の余地があるだろう。というのもヒト動物の痛みの相関項は、意識経験全般に関する今後の探求に依存するからである。しかし少なくとも、新皮質に含まれる何らかの神経構造がヒト動物の痛みに関連する——よって痛みの帰属の必要条件と考えられる——ことは、多くの経験的知見から示唆されている (cf. Dehaene 2014)。もしかするとそれは、新皮質全体であるか、あるいは新皮質の一部(例えば、侵害受容シグナルの「広域的ブロードキャスト」(cf. Dehaene 2014)に関わる構造)であるかもしれないが、いずれにしても、その神経構造が新皮質に含まれることには変わりない*5。以下では、痛みの帰属の必要条件となるような新皮質内の神経構造

4 この論証は、Brown & Key (2021) が「Absence of evidence 論証」(特にその後件否定バージョンである「FISH」と「FISH**」)として定式化したもの、あるいは Birch (2022) が「Theory-heavy アプローチ」に分類した議論と同様である。加えて、いくら形は異なるものの、非ヒト存在者の意識に関する類似した議論は、心の哲学の文脈においても以前から存在している (e.g. Block 2002)。

*5 これに対して、ヒト動物の意識を担うのは新皮質(あるいはその一部)ではないため、痛みの帰属の必要条件とはならないという反論がありうる。例えば Merker (2007) は、脳の皮質下領域である中脳(特に上丘)に、意識経験のための中核的メカニズムを見出そうとしている。よって彼の主張に従うならば、ある存在者は、たとえ新皮質を欠いていようとも、その中脳のメカニズムに起因して意識経験を持つことになる。この場合、新皮質やその一部が痛みの帰属の必要条件であることは否定され、よって No cortex, no cry 論証(加えてそれをより抽象化した不在性論証)の(1)が否定される

を「N 構造」と呼ぶ。それに伴い本論では、No cortex, no cry 論証をより抽象化し、以下の「不在性論証」として定式化する。

不在性論証

- (1) X が N 構造を持つことは、X に痛みを帰属するための必要条件である。
- (2) サカナは N 構造を持たない。
- (3) したがって、サカナに痛みを帰属することはできない。

サカナは新皮質を欠いているため、N 構造を持たないだろう。よって、No cortex, no cry 論証の場合と同様に、サカナは痛みを感じないという結論が支持されることになる。

これに対してサカナ意識論者は、何らかの仕方で反論しようと試みる。そのような反論のための戦略として最も一般的なのは、痛みの「多重実現可能性」に訴えるものである (cf. Browning & Birch 2022: 4; Brown & Key 2021, sect. 4; Michel 2019, sect. 2.2)。次節では、不在性論証に対する、多重実現可能性に訴えた反論を定式化する。

2.2 多重実現反論

不在性論証に対する最も一般的な反論は、痛みの多重実現可能性に訴えたものである。よって本論ではこの反論を、サカナ意識論者の基本的主張として理解する。この反論の下では、次のような描像が描かれることになる。ヒト動物が痛みを持つためには確かに N 構造が必要かもしれないが、非ヒト動物においては、新皮質とは無関係な神経構造によって痛みが実現されているかもしれない。したがって、N 構造は痛みの帰属の必要条件ではないため、N 構造を持たないことはサカナの痛みへの阻却子とはならないだろう。

例えば Godfrey-Smith は、痛みを持つ能力に関してこう述べる。

私たちは、この類の能力が異なる神経構造によって実現されうると知っている。哲学者が言うように、

だろう。この場合サカナ意識論者は、第2. 2節で見るとような多重実現可能性を認めないままに、ヒト動物とサカナが共有する神経構造(中脳)に依拠して、サカナの痛みを主張することができるだろう。実際に Barron & Klein (2016) は、Merker の理論に則った上で、昆虫——中脳に似た構造を持つ存在者——もまた痛みを持つという主張を行っている。しかし本論では、サカナ意識論者からのこのような反論の可能性については論じない。というのも、Merker の理論がそもそも正しい意識理論であるかどうか疑わしいからである。例えば、Merker が自身の主張の主な根拠の一つとして提示しているのは、水頭症の子供——先天的に大脳皮質に大きな損傷を受けている子供——の事例である (Merker 2007, sect. 5)。Merker は、水頭症の子供がしばしばその意識経験を示唆するような行動を示すことを根拠に、中脳が意識経験のために果たす役割を主張している。しかしこの議論に対しては、水頭症の子供に大脳皮質が残存している程度が様々であること、そこで示されている行動がしばしば無意識的に実行されうることなど、複数の難点が指摘されている (Birch (2022) の sect. 3 や Michel (2019) の sect. 2.2 での議論を参照されたい)。

これは「多重実現可能」なのである。もしそうであれば、これらの機能をもたらし、よって動物 X において痛みをもたらしうな機能が動物 Y にないと判明しても、動物 Y が痛みを感じないということにはならない。動物 Y はその機能をもたらしうな別のメカニズムを持つかもしれない、どちらの方法も共に痛みを生じさせるかもしれないのである。(Godfrey-Smith 2016: 2)

また、Manzotti はこう述べる。

当然ながら、鳥が飛ぶためには羽毛が必要である。しかし、羽毛が鳥にとっていくら重要であろうとも、羽毛の不在は飛行が不可能であることを含意しない。実際、コウモリは羽毛なしに飛ぶ。同様に、ある神経構造は、ホモ・サピエンスが痛みを感じるために形式的に必要なものでありうるが、例えばトラウトが痛みを感じるためには不必要でありうる。(Manzotti 2016: 1)*⁶

大きく異なる神経構造であっても同じ痛みタイプのトークンをもたらしうかもしれない、また、ほぼ同一の神経構造であっても異なるタイプのトークンをもたらしうかもしれない。(Manzotti 2018: 1)

このように複数の論者が、痛みは多重実現可能だと主張することによって、サカナが痛みを帰属される可能性を保持しようと試みている。

この反論は、不在性論証の(1)を否定するものである。つまりこの反論は、N 構造を持つことが痛みの帰属の必要条件であることを否定するのである。よってこの反論が正しいならば、サカナは N 構造以外の神経構造によって痛みの意識経験を実現しているかもしれないため、N 構造を持たずとも痛みを帰属されうる。以下ではこの反論を「多重実現反論」と呼ぼう。

多重実現反論の下でサカナは、痛みを実現すると考えられるような、N 構造以外の神経構造を持つと想定される。つまりこの神経構造は、新皮質を持たない非ヒト動物に痛みを帰属するための必要条件となるのである。以下ではこの神経構造を「M 構造」と呼ぼう。M 構造が明らかになったならば、サカナはその M 構造によって痛みを実現できると考えられるため、痛みを合理的に帰属されうる。

当然、痛みが多重実現可能ならば、痛みを実現すると考えられる神経構造は複数種類(例えば動物種ごとに)存在しうるだろう。しかし、第2.3節以降での議論はいかなる M 構造に関しても成り立つものだと考えられる。よって本論では、サカナに痛みを帰属する必要条件についてのみ論じ、他の動物種の場合については議論しない。

ここで一点、注意すべきことがある。それは、多重実現反論では、ヒト動物と全く同じ痛みがサカナにお

*⁶ 他の論者も同様に、様々なアナロジーを利用しながら痛みの多重実現可能性を支持する。それは例えば、鼓膜を持たないコオロギが音を検知できること、歯を持たない鳥が固形物を食べられること、足のないサカナが移動できること (Dinets 2016)、プロペラを欠いた飛行機が飛べること (Ng 2016)、歯と胃液が同様の機能を果たすこと (Jones 2016) などである。

いて実現されるとは想定されないことである。むしろこの反論ではしばしば、サカナにおいて実現される痛みは、ヒト動物におけるそれとはある程度異なると想定される。例えば Seth は、痛みの多重実現可能性を支持しつつこう述べる。

では、サカナの痛みは、ヒトの痛みとは異なる生物物理学的実現に依拠しているのだろうか？ 見たところ、この考えはもっともらしい。なぜなら、意識的なサカナの痛みは(もし存在するならば)人間の痛みや苦しみとは質的に異なり、かつそれほど分化されていないと考えられるからである。(Seth 2016: 3)

また、サカナ意識論者の Sneddon が一言で述べるには、「サカナは確かに痛みを感じるが、それは本質的により原始的」である (Sneddon 2011: 213)。これらの主張は、サカナの痛みとヒト動物のそれが異なるものであることを示唆している。

しかし多重実現反論は、サカナの痛みがヒト動物のそれと完全に異なるものであると想定することはできない。なぜならそれは、何らかの意味で「痛み」と呼ばれうるものでなくてはならないからである。つまり、まさに「痛み」が多重実現されていると主張するためには、サカナの痛みと私たち(ヒト動物)の痛みは、完全に同じではなくとも、何らかの意味で同じでなければならないのである (cf. Lewis 1980: 216)。

よって以下では、議論の見通しをよくするために次のように仮定しよう。すなわち、多重実現反論によって擁護されるサカナの痛みは、私たち(ヒト動物)自身が持つ痛みと大まかに同じものである、と。したがって、私たちが本論の残りで取り組むべき問いは「私たちが知っているこの痛みと同じようなものをサカナは持つだろうか」というものになる。この仮定によって私たちは、私たち自身が完全に未知であるような痛み(それが痛みと呼ばれうるならば)が存在する可能性を脇に置くことができる。

以上が多重実現反論の概要である。まとめるとこの反論は、N 構造が痛みの帰属の必要条件であることを否定したうえで、サカナへの痛みの帰属は、サカナが持つ M 構造によって支持されると主張する。この反論が成功しているならば、不在性論証は、N 構造の不在を阻却子として利用することができないため、サカナへの痛みの帰属を否定できないだろう。

しかしこの反論は、不在性論証を論駁することはできるかもしれないが、サカナの痛みを支持することはできない。なぜならこの反論の下では、サカナの痛みの不在の代わりに、その不可知が導かれるからである。次節ではこのことを確認しよう。

2.3 不可知性論証

第2.1節で確認したように、不在性論証は、サカナへの痛みの帰属に対する阻却子を示すことによって、サカナに痛みを帰属することはできないと結論付ける。その阻却子とは、サカナが N 構造を持たないことであった。しかし第2.2節で確認したように、サカナ意識論者は、痛みの多重実現可能性に訴えた反論によって、不在性論証を論駁しようと試みる。この反論によると、痛みは多重実現可能であるため、N 構造は痛みの帰属の必要条件ではない。したがって、N 構造の不在はもはや、サカナの痛みに対する阻却

子とはなりえない。そしてサカナへの痛みの帰属は、その M 構造によって支持されることになる。

確かにこの反論は、N 構造が痛みの帰属の必要条件であることを否定し、不在性論証を論駁できるかもしれない。しかし、サカナへの痛みの帰属を支持することは困難だろう。なぜなら、サカナが持つ M 構造を特定することには原理的な困難が存在するからである。この困難は Michel (2019) や Birch (2022)、Carruthers (2019)、Hung (2023) が、それぞれ異なる文脈で指摘しているものである。以下では、特に Michel (2019) の議論に倣ってこの論点を指摘する。

まず注目すべき点は、たとえサカナ意識論者であっても、痛みの帰属に関する何らかの阻却子を必要とするという点である (cf. Birch 2022, Michel 2019)。なぜなら、サカナ意識論者(少なくともその多く)は決して、痛み様行動を示すあらゆる存在者に痛みを帰属したいわけではないからである。

例えば、頭のないカエルであっても、酸による刺激や急な熱刺激に対して、足を動かして回避行動——背中から酸を取り除く、熱湯から脱出したいかのようにもがくといった行動——をとる (cf. Lewes 1873)。また、線虫であっても、刺激に対する回避行動を学習することができる (cf. Ha et al. 2010)。これらの痛み様行動は、頭のないカエルや線虫に痛みを帰属する理由となるかもしれない。しかし、たとえサカナ意識論者であっても、これらの存在者にまで痛みを帰属しようとする者はほとんどいない^{*7}。したがって、サカナ意識論者であっても、頭のないカエルや線虫への痛みの帰属を妨げるような、何らかの阻却子を必要とするのである (cf. Michel 2019, sect. 3.1)。

しかし、多重実現可能性が前提にあるならば、何らかの阻却子を発見することは原理的に困難である。というのも、そのような阻却子を発見したと主張するために、私たちは論点先取を犯さなければならないからである。以下、このことを確認しよう。

例えばサカナ意識論者は、N 構造の不在の代わりに、脳——高度に発達した神経節——の不在を阻却子として提案するかもしれない。この提案に従うならば、一方でサカナは脳を持つため、痛みが帰属され、他方で頭のないカエルや線虫は脳を持たないため、痛みの帰属が阻却されることになるだろう。

しかしこの提案はそのままでは成功しないと思われる。なぜなら、痛みの多重実現可能性が認められている以上、脳の不在は阻却子ではありえないからである。痛みが多重実現可能であるならば、脳を持たない存在者であっても、別の何か(例えばごく単純な神経系)によって痛みを実現しうるだろう。よって、脳の不在はもはや阻却子の役割を果たしえないことになる。つまり、サカナ意識論者による上記の提案は、自身が不在性論証に対して行ったものと同様の反論を受けることになるのである (cf. Michel 2019, sect. 3.2)。

^{*7} ただし一部の論者は、頭のないカエルや線虫にも痛みを帰属しようとするかもしれない。例えば、意識の存在論的本性に関して何らかの形の「汎心論 (panpsychism)」(Chalmers 2013) にコミットする論者は、これらの存在者であっても何らかの痛みを持つと考えるだろう。あるいは、そのようなコミットメントを明示しておらずとも、非常に原始的な存在者(例えば原核生物 (cf. Baluška & Reber 2019))の意識を支持する論者であれば、頭のないカエルや線虫の痛みもまた認めるかもしれない。このような考えは、即座に否定されるものではないものの、他の経験科学理論との整合性や存在論的コストを考慮すると、魅力的なものとは言い難い。よって本論では、頭のないカエルや線虫にも痛みが帰属される可能性を取り上げない。

では、サカナ意識論者は、脳の不在が阻却子であることをいかにして支持できるだろうか。そのための可能な方法は二つに分けられるだろう。一つは、脳の不在が阻却子であることの証拠をヒト意識研究から得るという方法、もう一つは、その証拠を動物意識研究から得るという方法である。

一つ目の方法は成功しないだろう。なぜなら第2. 1節で見たように、ヒト動物のケースから得られるのは、新皮質(あるいは N 構造)が痛みを実現しており、よって痛みの帰属の必要条件であることの証拠だけであり、つまり、その不在が阻却子たりうることの証拠だけだからである。換言すると、新皮質を欠いた脳であっても痛みを実現できることの証拠は、ヒト動物——新皮質を持つ存在者——のケースからは得られないのである^{*8}。したがって、ヒト意識研究からは、脳の不在が阻却子であることの証拠は得られないことになる。

もう一つの、脳の不在が阻却子であることの証拠を動物意識研究から得るという方法もまた、成功しないと思われる。なぜなら、そのような証拠を得るためには、脳を持つ非ヒト動物が痛みを持ち、かつそうでない非ヒト動物は痛みを持たないという仮説を支持しなければならないが、これは論点先取なしには為されえないからである (cf. Birch 2022: 136, Carruthers 2019: 146, Hung 2023: 590–591, Michel 2019: 2419–2420)。

上記の仮説を支持するためには、様々な非ヒト動物(サカナも含む)に関して、(1)その動物が脳を持つかどうか、(2)その動物が脳を持つならば痛みを持ち、脳を持たないならば痛みを持たないかどうか、という二点を確認する必要がある。これらの知見の積み重ねがあって初めて、サカナ意識論者は、脳が痛みの帰属の必要条件であること——よって脳の不在が阻却子であること——を帰納的に支持できるようになるだろう。

しかし(2)は、まさにサカナ意識論者が答えようとしている問いに他ならない。サカナ意識論者は、サカナもまた痛みを実現できると示し、サカナへの痛みの帰属を支持することを目指していた。しかし、上記の議論が正しいならば、サカナ意識論者は、目標としていた主張を前提に置かなければならない。つまり、脳が痛みの帰属の必要条件であると示すために、脳を持つ非ヒト動物が痛みを持つこと自体を前提しなければならぬのである (cf. Michel 2019: 2419–2420)。したがって私たちは、論点先取を犯さない限り、非ヒト動物のケースから阻却子についての証拠を得ることができない。

以上より、可能な方法のいずれによっても、脳の不在が阻却子たりうることの証拠は得られない。まとめると、サカナ意識論者は、動物意識に関する論点先取を犯さない限り、脳の不在が阻却子であると主張することができないのである。

このことは、脳の不在以外の阻却子についても同様であろう。サカナが持ち、かつ一部の存在者(頭のないカエルや線虫など)が持たないような M 構造を示すためには、サカナが痛みを持ち、かつ一部の存在者が痛みを持たないということ自体を前提しなければならぬのである。これは論点先取であろう^{*9}。よ

^{*8} これに対して、新皮質を持たないヒト動物(例えば水頭症患者)の特殊なケースからそのような証拠が得られるはずだという反論があるかもしれない。この点については注 5 を参照されたい。

^{*9} ここで、次のような指摘があるかもしれない。すなわち、サカナと類似した神経構造を持ち、かつサカナよりも意識を持ちそうな非ヒト動物が意識を持つと前提するならば、サカナの意識に関する論点先取を犯さないままに、サカナへの痛

ってサカナ意識論者は、論点先取なしに **M** 構造を発見する術を欠いており、つまり、論点先取なしに拒却子を特定する術を欠いていると考えられる。

第2.2節で見たように、多重実現反論は、**N**構造が痛みの帰属の必要条件であることを否定したうえで、サカナへの痛みの帰属は、サカナが持つ **M** 構造によって支持されると主張していた。しかし本節での議論が正しいならば、この反論は、痛みの帰属の必要条件が **N** 構造であることは否定できるかもしれないが、サカナへの痛みの帰属を支持することはできない。なぜなら、サカナ意識論者は **M** 構造を論点先取なしに特定することができないため、**M** 構造は原理的に不可知だからである^{*10}。

以上の議論を本論では「不可知性論証」と呼び、以下のようにまとめる。

不可知性論証

- (1) サカナが **M** 構造を持つことは、サカナに痛みを帰属するための必要条件である。
- (2) **M** 構造は不可知であるため、サカナが **M** 構造を持つかどうかは不可知である。
- (3) したがって、サカナに痛みを帰属できるかどうかは不可知である。

この論証が正しいならば、サカナ意識論者は、たとえ多重実現反論を採用し、不在性論証の前提(1)を否定しようとも、サカナに痛みを帰属することはできない。というのも、**M** 構造が不可知である以上、サカナに痛みを帰属できるかどうかは不可知だからである。

2.4 サカナ意識論者の困難

ここまでの議論をまとめよう。第2章を通して私は、反サカナ意識論証を二つ定式化した。第一の論証は不在性論証であり、これによると、サカナに痛みを帰属することはできない。なぜなら、サカナは **N** 構造を持たないからである。これに対してサカナ意識論者は、多重実現反論に訴えることで反論した。しかしこの

みの帰属を支持できるのではないかと、確かにこの議論は、サカナの痛みに関する論点先取ではないだろう。ただしこのような議論の下ではむしろ、前提に関する後退構造が問題となる。つまり、サカナの意識を支持する論証を作るためには、サカナよりも意識を持ちそうな他の非ヒト動物の意識を前提しなければならず、その動物の意識を支持するためには、また別の非ヒト動物の意識を前提しなければならないという、後退構造が成立してしまうのである。このような後退は最終的に、それ以上に意識を持ちそうな非ヒト動物がいなくなってしまうか、あるいは同じ非ヒト動物を再び前提に置き、悪循環に陥ってしまうだろう。本論で示す論点先取というのは、正確にはこのような後退構造として理解されるべきかもしれない。本論ではこの論点は扱わないが、たとえ問題が正確には後退構造なのだとしても、サカナに痛みを帰属することの原理的困難が変わらず帰結するため、サカナ意識論者はやはり困難に直面するだろう。

^{*10} このような議論を行う論者の一人である Carruthers (2019) は、**M** 構造の不可知性からさらに議論を進め、非ヒト動物の意識は「不確定性 (indeterminacy)」であるという存在論的な主張を行っている。彼の考えでは、ヒト動物様の広域的ブロードキャスティング基盤以外の神経構造が意識経験を実現できるかどうかは不可知である以上、私たちに可能な最善の選択肢は、動物意識に関する事実がそもそも存在しない (There are no fact of the matter) と考えることである (Carruthers 2019, chap. 7)。本論では、**M** 構造の不可知性を指摘するだけに留め、それが不確定である可能性については論じない。

反論は、不在性論証を論駁できるかもしれないが、サカナへの痛みの帰属を支持することはできない。というも、ここでサカナ意識論者は、第二の論証である不可知正論証に直面するからである。これによると、サカナに痛みを帰属できるかどうかは不可知である。

不在性論証と不可知性論証は多くの場合、異なる論者によって議論されてきた¹¹。しかし、それらを定式化し組み合わせることで、その困難はより一層明らかになる。一方で、ヒト動物のケースから経験的証拠を得られるような、新皮質内の神経構造を痛みの帰属の必要条件とする——N 構造に訴える——ならば、サカナはそれを持たないため、サカナに痛みを帰属することはできない。他方で、サカナにおいて痛みを実現するような、新皮質とは無関係な神経構造を痛みの帰属の必要条件として想定する——M 構造に訴える——ならば、サカナに痛みを帰属できるかは不可知である。というも、その神経構造を特定するためには論点先取が必要だからである。以上の困難は、サカナ意識論者のジレンマとして以下のように定式化できる。

サカナ意識論者のジレンマ

第一の角：痛みの帰属の必要条件を新皮質内の神経構造とするならば、サカナに痛みを帰属することはできない。

第二の角：痛みの帰属の必要条件を新皮質とは無関係な神経構造とするならば、不可知性論証に直面する。

サカナ意識論者は、このジレンマをどうやって抜け出せるだろうか。おそらく多くのサカナ意識論者は、不可知性論証に挑み、サカナが共有する——同時に、その他の一部の存在者が共有しない——ような M 構造を発見しようと試みるだろう。換言すると、この線をとる論者は、痛みの多重実現に一定の制限をかけることで、サカナを含む一部の非ヒト動物にのみ痛みを帰属しようと試みるのである。例えばこれらの論者は、侵害の受容に応じて適応的反応を引き起こすような、進化的に古い起源を持ち、よってサカナもまた共有するような機能に着目し、その機能を実現する神経構造だけを痛みの帰属の必要条件とするかもしれない (e.g. Godfrey-Smith 2016: 2)。

このような主張のためには当然、サカナ意識やヒト意識に関する経験的知見の蓄積が必須である。しかし私の考えでは、それだけではサカナへの痛みの帰属を支持するために不十分である。というも、ある経験的知見がサカナの痛みの証拠として解釈されること——同時に、サカナ以外の一部の存在者に関する知見が痛みの証拠として解釈されないこと——自体に対する正当化がなされていないからである。そのような正当化のためには、サカナ意識論者は、意識の存在論的身分をめぐる議論に取り組んでいく必要があるだろう。

例えば Michel は、「意識のハード・プロブレム」(Chalmers 1996) が未解決であることを理由に、サカナ

¹¹ ただし Michel (2019) は本論と同様に、痛みの帰属を否定する立場とそれを不可知だとする立場のそれぞれについて論じている。本論の第2章での議論は彼の議論に依るところが大きい。

において痛みが多重実現されることに懐疑的である (Michel 2019, sect. 3.3–3.4)。痛みはそもそも、それが持つ現象的性質の観点から一人称的に定義されていた。そして彼の考えでは、痛みに関する三人称的な機能的定義は現時点で存在していない。というのも、そのような定義を行うことこそが、哲学者たちが今まさに取り組んでいる意識のハード・プロブレムに他ならないからである。よって Michel の考えるところでは、サカナがある機能を実現していることは、サカナが痛みもまた実現していることを含意しない。このような理由から彼は、サカナにおいて痛みが実現されることについて、その可能性を否定はしないものの、懐疑的な態度を採っている。

このように、意識経験の一人称的な性格と三人称的な定義との間のギャップが、経験的知見を意識経験の証拠とみなすことに対する障害となることを踏まえると、経験的知見に基づいてサカナに痛みを帰属しようとする論者たちは、このギャップをめぐる哲学的議論に取り組み、それについての明確な答えや方針を示す必要がある。例えばこれらの論者は、「タイプ B 物理主義」(Chalmers 2010) を採り、ヒト動物がこのようなギャップを見出す理由に関する哲学的説明を採用しつつ、意識経験を特定の物理的・機能的状態に還元しようと試みることもできる。あるいは「タイプ A 物理主義」(Chalmers 2010) を採ることで、ギャップやハード・プロブレムを生じさせるような一人称的な意識経験の存在を否定し、非ヒト動物の知覚・認知能力を直接の研究対象とすることもできるだろう。

痛みの存在論的身分をめぐる哲学的議論に取り組むことで、サカナ意識論者は、ある経験的知見が意識経験の証拠とみなされることを正当化することができる。よって不可知性論証に応答し、ジレンマを抜け出すことができるだろう。このようなさらなる議論の必要性を示しているという意味で、反サカナ意識論証は、サカナ意識論者にとって真剣に考慮すべきもののなのである。

3 反サカナ意識論証の支持者の困難

第2章では、反サカナ意識論証がサカナ意識論者の困難を示していることを論じた。よってサカナ意識論者は、反サカナ意識論証を真剣に考慮し、それを克服するための議論を行う必要があるだろう。ただし私の考えでは、反サカナ意識論証は、サカナ意識論者にのみ困難をもたらすものではない。この論証は、その支持者に対してもまた困難をもたらすことになるだろう。

反サカナ意識論証は、サカナ意識論者の主張に対する批判を、一般的な形に定式化したものである。よって、この論証を支持する論者であっても、それぞれの立場には違いがある。例えば、痛みの帰属の必要条件となる神経構造に関して、Key (2016) は哺乳類動物が共有するような新皮質内の構造だと考えているが、Carruthers (2019) はヒト動物のみが持つ神経構造だと考えている。またサカナの持つ痛みに関して、Birch (2022) は反サカナ意識論証を受け入れつつも積極的にそれを支持する道を模索しているが、Michel (2019) は(少なくとも現時点では)不可知論にとどまるべきだと主張し、Key は否定的な立場を採っている。

しかし私の考えでは、反サカナ意識論証は、これらの論者の多くに対してもまた困難をもたらす。その困難とは、これらの論者が、いかなる非ヒト動物にも痛みを帰属できないか、あるいはサカナ意識論者と同

様に不可知性論証に直面するかというジレンマに陥ってしまうことである。第3章ではこのジレンマを定式化する。

反サカナ意識論証においては、N 構造あるいは M 構造、つまり痛みの帰属の必要条件がその前提に含まれている。よって反サカナ意識論証に訴える論者は、痛みの帰属の必要条件を提案しなければならないだろう。例えば Carruthers (2019) は、痛みの帰属の必要条件として、ヒト動物様の広域的ブロードキャスト基盤を提案している。広域的ブロードキャストとはつまり、ある表象が脳内の様々な消費者システムに対して共有され、それらのシステムにとって利用可能になることである (cf. Dehaene 2014)。Carruthers によると、あるヒト動物が持つ意識経験は、その時脳内で生じている広域的ブロードキャストに還元される。ここで重要なのは、Carruthers が次のように考えていることである。すなわち、たとえある非ヒト動物がヒト動物様の広域的ブロードキャスト基盤に類似した神経構造を持っていようと、この神経構造は痛みの帰属を支持することはない、と (Carruthers 2019, chap. 7)。

ヒト動物と非ヒト動物の神経構造は複数の点で異なっている。例えば、言語報告システムはヒト動物に固有の消費者システムであり、情動制御や長期記憶をつかさどるシステムの発達度合いもヒト動物と非ヒト動物で異なっている (ibid.: 141–142)。これが意味するのはつまり、ヒト動物と非ヒト動物の間では、広域的ブロードキャストに関わる部分も含め、その神経構造が異なっているということである。

そして彼の考えでは、意識経験を持つと私たちが前提できる存在者は、意識経験を言語報告できるヒト動物 (特に健康な成人) だけである (ibid., sect. 8.7)。つまり彼は、他の存在者が意識経験を持っていると知るための唯一の方法は、その存在者が自身の意識経験を報告することだと考えているのである。よって Carruthers の考えに則ると、意識経験を実現する神経基盤についての証拠は、ヒト動物からしか得られない。したがって、私たちに可能なのは、意識経験をヒト動物様の広域的ブロードキャスト基盤に還元することだけであることになる^{*12}。つまり、非ヒト動物が持つ神経構造は、ヒト動物の持つ広域的ブロードキャスト基盤とはその構造が異なっている以上、その動物への意識経験の帰属を支持しないのである。

これに対して次のような批判があるかもしれない。すなわち、広域的ブロードキャストに訴える他の論者は大抵、ヒト動物だけではなく、ヒト動物の広域的ブロードキャスト基盤に類似した神経構造を持つ非ヒト動物にもまた意識経験を認めているため (e.g. Dehaene 2014)、Carruthers の提案はあまりに偏狭なものなのではないか、と。

Birch (2022) に倣うと、Carruthers と他の論者との違いは、ヒト動物から得られる証拠の解釈方法の違いとして描写される。まず前提として、Carruthers と他の論者は共に、ヒト動物から得られる経験的証拠に依存している。その証拠とは、「マスキング」や「注意の瞬き」などを利用した実験パラダイムによって、意識的に経験されたりされなかったりするような知覚刺激を作り出し、それを意識的に経験したかどうかを被験者に言語報告してもらい、意識的だった場合とそうでなかった場合の脳活動を比較することによって得られ

^{*12} 以上の考えに従って彼は、乳児や意識障害患者の意識もまた不可知 (そして不確定) であると主張している。詳しい議論は Carruthers (2019, sect. 8.6) を参照されたい。

るものである (cf. Dehaene 2014)。このような手法によって、ヒト動物^{*13}の持つ意識経験と、ヒト動物様の広域的ブロードキャスト基盤との相関の証拠が得られる。

この証拠を、Carruthers と他の論者は異なる仕方で解釈する。一方で Carruthers は、ヒト動物から得られる上記の証拠を、ヒト動物の意識経験のみに関するものとして解釈する。つまり彼の考えでは、上記の証拠から判明するのは、ヒト動物様の広域的ブロードキャスト基盤が、意識経験の帰属の必要条件であろうということではないのである (cf. Birch 2022: 135–136)。

他方で例えば Dehaene は、ヒト動物から得られる上記の証拠を、あらゆる存在者の意識経験へと拡張可能なものとして解釈する。彼の考えでは、非ヒト動物は、ヒト動物の広域的ブロードキャスト基盤にある程度類似したものを持っていれば、意識経験の帰属の必要条件を満たすとみなされる。つまり彼は、ヒト動物から得られる直接的な証拠を越え、ヒト動物と神経的に異なる存在者の意識経験に関する推論を行っているのである (cf. Birch 2022: 136)。

ただし、後者の解釈における推論が合理的かどうかは疑われうる。というのもこの推論は、具体的にどのような神経構造が意識経験の帰属の必要条件であるのかに関して、第2.3節で見たような論点先取を犯さざるをえないと考えられるからである。つまり、ある神経構造が意識経験の帰属の必要条件であると主張するためには、それを持つ非ヒト動物が痛みを持ち、かつそれを持たない存在者が痛みを持たないこと自体を前提せざるをえないと考えられるのである。よって Dehaene の主張は、多重実現反論と同様に、不可知性論証に直面するだろう。そして Birch が論じるには、Dehaene の推論がいかんして論点先取を回避できるのかに関して、その支持者たちは沈黙しているように見える (ibid.: 136)。上記の議論が正しいならば、Carruthers の提案は決して偏狭なものではなく、むしろ慎重で賢明なものだと考えられるだろう。

以上が Carruthers の提案である。彼の提案を一般化すると次のようになるだろう。すなわち、意識経験を確かに持つ事例として反サカナ意識論証の支持者が前提できるのはヒト動物だけであるため、意識経験の必要条件—N 構造あるいは M 構造—たりうるものはヒト動物様の神経構造だけである、と。よって彼の提案に従うならば、反サカナ意識論証はあらゆる非ヒト動物(非ヒト哺乳類動物も含む)に対して痛みが帰属できないこと、あるいは帰属できるかが不可知であることを含意する^{*14}。

多くの反サカナ意識論証の支持者は、Carruthers の提案を採用したいとは思えないだろう。というのも Carruthers の提案は、その意識の存在が常識とされているような多くの非ヒト動物(例えば多くの哺乳類動物)の意識に疑問を呈するラディカルなものであり、実際に複数の批判にさらされているからである (e.g. Birch 2020, Black 2020, Lee 2022, Simon 2020)。例えば Black (2020) は、Carruthers の提案は、哺乳類

^{*13} あるいはこのような実験手法は、ヒト動物の言語報告の代わりに、類人猿(マカクザルなど)のレバーを使った報告によって行われる場合もある。したがって、Carruthers 自身は認めていないが、彼の提案においても、一部の類人猿の意識経験が認められる余地はあるかもしれない。

^{*14} Carruthers 自身は、非ヒト動物意識の不確定性を主張しており、つまり、非ヒト動物が意識経験を持つかどうかについての事実はそもそも存在しないと主張している(注 10 も参照されたい)。第3章で取り上げているのはあくまで、痛みを持つとされる根拠に関しての彼の見解である。

動物だけにとどまらずヒト動物の意識もまた疑うことになる」と批判している。というのも、ヒト動物の間でもまた認知的・神経的構造は少しずつ異なっているため、ヒト動物の言語報告が信頼できるものだと示すためには、ヒト動物が意識経験を持つこと自体を前提しなければならないと思われる——そしてこれはまさに論点先取に思われる——からである^{*15}。したがって、もし Carruthers の提案を受け入れるならば、意識科学はその証拠基盤を完全に失いかねないのである。

このような批判を避けるためには、非ヒト動物への意識の帰属もまた可能であることを認める必要があるだろう。よって反サカナ意識論証の支持者は、例えば Key がそうしているように、新皮質やそれに含まれる神経構造を痛みの帰属の必要条件として措定し、ヒト動物以外の哺乳類動物もまたその条件を満たすと考えことになる。

しかしここで注意すべきなのは、Key の提案においても、ヒト動物から得られる経験的証拠が、意識経験(痛みも含む)の唯一の証拠として理解されているということである。というのも彼の考えでは、ヒト動物こそが「自身の持つ感じを直接報告できる唯一の種」だからである (Key 2016: 4)。よって反サカナ意識論証の支持者は、たとえ Carruthers の提案を受け入れなかったとしても、それを受け入れた場合と同様に、ヒト動物からの証拠に依存することになるだろう。

したがって Key の提案の下では、ヒト動物のものとは構造が異なる新皮質を持つ動物——ヒト動物以外の哺乳類動物——が痛みを持つと主張するために、それらの動物の痛みについて、Dehaene と同様の推論を行わなければならない。つまり、具体的にどのような神経構造が意識経験の帰属の必要条件であるのかに関して、第2.3節で見たような論点先取を犯さざるをえないのである。よってこの主張は、多重実現反論と同様に、不可知性論証に直面することになるだろう。

以上より、反サカナ意識論証の支持者が陥るジレンマは、以下のように定式化される。

反サカナ意識論証の支持者のジレンマ

第一の角: 痛みの帰属の必要条件をヒト動物様の神経構造とするならば、いかなる非ヒト動物の痛みも認められない。

第二の角: 痛みの帰属の必要条件をヒト動物以外も共有する神経構造とするならば、不可知性論証に直

^{*15} その他の批判として、例えば Birch (2020) は、Carruthers が選択的な理論的前提を置いているように思われることを批判し、加えて、非ヒト動物が共有するような意識の中核的メカニズムが特定可能でありうることを指摘している(ただし2022年の論文では、彼は Carruthers の主張をある程度受け入れている)。Black (2020) は、すでに述べた批判に加えて、Carruthers がその主張の前提である「グローバル・ワークスペース理論」について非標準的理解を採用していることを批判している。Lee (2022) や Simon (2020) は、彼が意識に関する程度と不確定性を概念的に混同しているように見えることを批判している。これらの批判には、彼の N 構造に関する見解に対するものもあれば、それを持たない動物の意識の不可知性(不確定性)という見解に対するものもある。とはいえ、N 構造に関する Carruthers の見解が擁護されうるかどうかを論じるためには、そのための論文が新たに必要であるため、本論ではこれを論じない。本論では単に次のように想定する。すなわち、これらの批判に対処する作業は、少なくとも容易に達成されるものではなく、よって反サカナ意識論証の支持者が引き受けたいものではないだろう、と。

面する。

一方で、第一の角を掴んだならば、反サカナ意識論証の支持者は、あらゆる非ヒト動物に対して痛みを帰属できないか、あるいは帰属できるかどうかを不可知とすることになる。しかしこの主張は、非ヒト哺乳類動物のような、その痛みが自明視されている多くの動物の痛みに疑問を呈するものであり、Carruthers の主張と同様に問題を抱えるだろう。実際、サカナや昆虫といった非ヒト存在者の痛みに強く反対する Key ですらも (cf. Key 2016; Key, Arlinghaus, & Browman 2016)、非ヒト哺乳類動物の痛みには反対していない。したがってこの主張は、多くの反サカナ意識論証の支持者にとって避けたいものであろう。

他方で、第二の角を掴んだならば、反サカナ意識論証の支持者は、サカナ意識論者と同様に、不可知性論証に直面する。というのも反サカナ意識論証の支持者は、ヒト動物からの経験的証拠に依存している以上、非ヒト動物に痛みを帰属するために、論点先取を犯さざるを得ないからである。つまり、ある神経構造が意識経験の帰属の必要条件であると主張するためには、それを持つ非ヒト動物が痛みを持ち、かつそれを持たない存在者が痛みを持たないこと自体を前提せざるを得ないのである。したがって反サカナ意識論証の支持者は、自身が訴えた論証そのものに直面することになってしまうだろう。

以上のように反サカナ意識論証の支持者は、いかなる非ヒト動物の痛みも認められないか、あるいはサカナ意識論者と同様に不可知性論証に直面するかというジレンマを抱えている。これらの論者はジレンマを抜け出すことができるだろうか。例えばこれらの論者は、第一の角をとったうえで、非ヒト動物に痛みを帰属できるかどうかは不可知であると認めることができる。つまり、非ヒト動物が実際に痛みを持つかどうかに関して、いかなる実質的な主張も行わない立場を採ることができるのである。実際に Michel は、新皮質を持たない非ヒト動物の意識経験に関して、現時点で私たちはこのような不可知論の立場を採るべきだと考えている (Michel 2019: 2424)。ただし本論での議論が正しいならば、彼は新皮質を持つ非ヒト動物に関してもまた不可知論の立場を採るべきであろう。

このジレンマによって、反サカナ意識論証の支持者の多くは、自身の主張の見直しを迫られることになるだろう。というのも、反サカナ意識論証の支持者——少なくとも本論で取り上げた論者——は、サカナの痛みを疑いながらも、非ヒト哺乳類動物のような一部の動物の痛みは疑っていないからである。

4 反サカナ意識論証の意義

第3章での議論を通して、反サカナ意識論証の支持者の困難が明らかになった。それはすなわち、いかなる非ヒト動物の痛みも認められないか、あるいは不可知性論証に直面するかというジレンマに陥ってしまうことである。このジレンマは、反サカナ意識論証の支持者に対して、自身の主張の見直しを迫ることになるだろう。

しかしここで重要なのは、反サカナ意識論証の支持者がこのような困難を抱えるからと言って、第2章で論じたサカナ意識論者の困難に変わりはないということである。反サカナ意識論証の支持者が困難を抱える原因は、大まかに言えば、自身が訴える論証と自身の主張との間の齟齬である。つまり、反サカナ意

識論証が、あらゆる非ヒト動物に対して痛み帰属ができないこと、あるいは帰属できるかが不可知であることを含意するのに対して、その支持者がこの論証をサカナの痛みについてのみ利用しようとしたことが原因なのである。したがって、反サカナ意識論証の支持者が困難を抱えることは、反サカナ意識論証がサカナ意識論者に困難をもたらすこととは独立である。すなわち、反サカナ意識論証は、サカナ意識論者とその批判者の双方に対して困難をもたらすのである。

よってこれらの論者は、自身の主張を見直し、いかにしてこの困難に対処するかを考えなければならない。つまり反サカナ意識論証は、サカナ意識論者とその批判者の双方に対して、さらなる議論の必要性を示しているのである。したがって反サカナ意識論証は、サカナ意識論者にとっても、さらにはこの論証の支持者にとっても、より真剣に考慮すべきものである。

では、反サカナ意識論証に応答するために、それぞれの論者にはいかなる議論が可能だろうか。例えばサカナ意識論者は、第2.4節で見たように、意識の存在論に取り組み、サカナが共有するような何らかの機能として痛みを定義することができるだろう。このような議論によってサカナ意識論者は、痛みの帰属の必要条件について自身の立場を明確化することができる。

このような議論は、反サカナ意識論証の支持者もまた行うことができるものである。すなわちこれらの論者は、意識の存在論に取り組み、サカナは共有しないが他の一部の非ヒト動物は共有するような何らかの機能として痛みを定義できるのである。この議論に訴えるならば、サカナ意識論者とその批判者の間の対立はそれほど大きなものではなくなる。両者の対立は単に、意識の存在論における機能主義の中での対立に収まるだろう。

それぞれの論者がどのような線を採用にせよ、このような議論は、それぞれの主張の明確化につながるはずである。すなわち、反サカナ意識論証への応答を通して、自身の主張がいかなる前提を置いており、そこから出てくる帰結が正確にはいかなるものなのかを再考することになるのである。このような明確化によって、サカナ意識論者とその批判者は、互いの主張のどの点が対立しているのかを理解し、より建設的な議論を目指すことができるだろう。

5 結論

本論では、サカナ意識論者に反対する議論を反サカナ意識論証として定式化し、その説得力と帰結を分析した。第2章では、二つの反サカナ意識論証によってサカナ意識論者の困難が示されることを論じた。第一の論証は不在性論証であり、これによると、サカナに痛みを帰属することはできない。なぜなら、サカナは新皮質を持たないため、痛みの帰属のための必要条件だと考えられる新皮質内の神経構造——N 構造——を持たないからである。これに対してサカナ意識論者は、痛みは他の神経構造によっても実現されうると主張することで、N 構造が痛みの帰属の必要条件であることを否定し、サカナに痛みを帰属しようと試みる。しかしこの場合、サカナ意識論者は不可知性論証に直面する。これによると、サカナに痛みを帰属する必要条件を明らかにするためには論点先取が必要であるため、サカナに痛みを帰属できるかどうかは不可知である。そしてこれらの論証を組み合わせることで、サカナ意識論者のジレンマが明らかにな

った。

しかし第3章で論じたように、反サカナ意識論証は、サカナ意識論者だけでなく、その支持者に対してもまた困難をもたらす。それはすなわち、反サカナ意識論証の支持者がジレンマに直面してしまうことである。一方で、痛みの帰属の必要条件をヒト動物様の神経構造とするならば、反サカナ意識論証の支持者はいかなる非ヒト動物の痛みも認められない。他方で、痛みの帰属の必要条件をヒト動物以外も共有する神経構造とするならば、反サカナ意識論証の支持者は、サカナ意識論者と同様に不可知性論証に直面する。というのも反サカナ意識論証の支持者は、ヒト動物からの経験的証拠に依存している以上、非ヒト動物に痛みを帰属するために、論点先取を犯さざるを得ないからである。このように反サカナ意識論証は、その支持者に対してもまた困難をもたらすのである。

以上の議論から、第4章でまとめたように、次の結論が導かれる。すなわち、反サカナ意識論証は、サカナ意識論者とその批判者の双方に対して困難を提示しているのだ、と。つまり、反サカナ意識論証は、これらの論者のさらなる議論の必要性を示しているのである。そのような議論の例として、一方でサカナ意識論者は、意識の存在論の議論に取り組むことが可能である。他方でその批判者は、非ヒト動物の痛みの帰属に関して不可知論の立場を採ったり、あるいはサカナ意識論者と同様に、意識の存在論の議論に取り組むことが可能である。このような議論によって、それぞれの主張の明確化や、より建設的な議論の実現が可能になるだろう。よって反サカナ意識論証は、サカナ意識論者にとっても、さらにはこの論証の支持者にとっても、より真剣に考慮すべきものなのである。

謝辞

本稿の草稿に対して、太田紘史氏、篠崎大河氏、そして本誌の二名の匿名査読者から有益なコメントを頂いた。この場を借りて感謝申し上げます。

参考文献

- [1] Baluška, F. & Reber, A. (2019). “Sentience and Consciousness in Single Cells: How the First Minds Emerged in Unicellular Species”, *BioEssays*, 41(3), e1800229. <https://doi.org/10.1002/bies.201800229>
- [2] Barron, A. B. & Klein, C. (2016). “What insects can tell us about the origins of consciousness”, *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 113(18), pp. 4900–4908.
- [3] Birch, J. (2020). “Global workspace theory and animal consciousness”, *Philosophical Topics*, 48 (1), pp. 21–37.
- [4] ——— (2022). “The search for invertebrate consciousness”, *Noûs*, 56(1), pp. 133–153.
- [5] Black, D. (2020). “The global workspace theory, the phenomenal concept strategy, and the distribution of consciousness”, *Consciousness and Cognition*, 84, pp. 1–11.
- [6] Block, N. (2002). “The harder problem of consciousness”, *Journal of Philosophy*, 99(8), pp. 391–425.

- [7] Brown, C. (2016). “Fish pain: An inconvenient truth”, *Animal Sentience*, 3(32).
<https://doi.org/10.51291/2377-7478.1069>
- [8] Brown, D. & Key, B. (2021). “Is absence of evidence of pain ever evidence of absence?”, *Synthese*, 199, pp. 3881–3902.
- [9] Browning, H. & Birch, J. (2022). “Animal sentience”, *Philosophy Compass*, 17(5), e12822.
<https://doi.org/10.1111/phc3.12822>
- [10] Carruthers, P. (2019). *Human and Animal Minds: The Consciousness Questions Laid to Rest*, Oxford: Oxford University Press.
- [11] Chalmers, D. J. (1996). *The Conscious Mind: In search of a fundamental theory*, Oxford: Oxford University Press. (デイヴィッド・J・チャーマーズ (2001).『意識する心：脳と精神の根本理論を求めて』, 林一訳, 白揚社.)
- [12] ——— (2010). *The Character of Consciousness*, New York: Oxford University Press. (デイヴィッド・J・チャーマーズ (2016).『意識の諸相』, 太田紘史・源河亨・佐金武・佐藤亮司・前田高弘・山口尚訳, 春秋社.)
- [13] ——— (2013). “Panpsychism and panprotopsyism”, *The Amherst Lecture in Philosophy*, 8, pp. 1–35.
- [14] Dawkins, M. S. (2021). *The Science of Animal Welfare: Understanding What Animals Want*, Oxford: Oxford University Press.
- [15] Dehaene, S. (2014). *Consciousness and the Brain: Deciphering How the Brain Codes Our Thoughts*, New York: Viking. (スタニスラス・ドゥアヌ (2015).『意識と脳：思考はいかにコード化されるか』, 高橋洋訳, 紀伊國屋書店.)
- [16] Dinets, V. (2016). “No cortex, no cry”, *Animal Sentience*, 3(7).
<https://doi.org/10.51291/2377-7478.1027>
- [17] Dunlop, R., Millsopp, S., & Laming, P. (2006). “Avoidance learning in goldfish (*Carassius auratus*) and trout (*Oncorhynchus mykiss*) and implications for pain perception”, *Applied Animal Behaviour Science*, 97(2–4), pp. 255–271.
- [18] Godfrey-Smith, P. (2016). “Pain in parallel”, *Animal Sentience*, 3(21).
<https://doi.org/10.51291/2377-7478.1057>
- [19] Ha, H., Hendricks, M., Shen, Y., Gabel, C. V., Fang-Yen, C., Qin, Y., Colón-Ramos, D., Shen, K., Samuel, A. D. T., & Zhang, Y. (2010). “Functional organization of a neural network for aversive olfactory learning in *Caenorhabditis elegans*”, *Neuron*, 68, pp. 1173–1186.
- [20] Hung, J. (2023). “Animal consciousness and phenomenal concepts”, *Philosophical Psychology*, 36(3), pp. 580–600.
- [21] Jones, R. C. (2013). “Science, sentience, and animal welfare”, *Biology and Philosophy*, 28(1), pp. 1–30.

- [22] ——— (2016). “Fish sentience and the precautionary principle”, *Animal Sentience*, 3(10).
<https://doi.org/10.51291/2377-7478.1032>
- [23] Kammerer, F. (2022). “Ethics without sentience: Facing up to the probable insignificance of phenomenal consciousness”, *Journal of Consciousness Studies*, 29(3–4), pp. 180–204.
- [24] Key, B. (2016). “Why fish do not feel pain”, *Animal Sentience*, 3(1).
<https://doi.org/10.51291/2377-7478.1011>
- [25] Key, B., Arlinghaus, R., & Browman, H. I. (2016). “Insects cannot tell us anything about subjective experience or the origin of consciousness”, *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 113(27), E3813. <https://doi.org/10.1073/pnas.1606835113>
- [26] Key, B. & Brown, D. (2018). “Designing brains for pain: Human to mollusc”, *Frontiers in Physiology*, 9, 1027. <https://doi.org/10.3389/fphys.2018.01027>
- [27] Lee, A. Y. (2022). “Degrees of consciousness”, *Noûs*, 57(3), pp. 553–575.
- [28] Lewes, G. H. (1873). “Sensation in the spinal cord”, *Nature*, 9, pp. 83–84.
- [29] Lewis, D. (1980). “Mad pain and Martian pain”. Block, N. (ed.) *Readings in the Philosophy of Psychology*, pp. 216–222, Cambridge: Harvard University Press.
- [30] Manzotti, R. (2016). “No evidence that pain is painful neural process”, *Animal Sentience*, 3(11).
<https://doi.org/10.51291/2377-7478.1034>
- [31] ——— (2018). “The human nervous system is not the gold standard for pain”, *Animal Sentience*, 21(12). <https://doi.org/10.51291/2377-7478.1355>
- [32] Merker, B. (2007). “Consciousness without a cerebral cortex: A challenge for neuroscience and medicine”, *Behavioral and Brain Sciences*, 30(1), pp. 63–81.
- [33] Michel, M. (2019). “Fish and microchips: On fish pain and multiple realization”, *Philosophical Studies*, 176(9), pp. 2411–2428.
- [34] Ng, Y. (2016). “Could fish feel pain? A wider perspective”, *Animal Sentience*, 3(13).
<https://doi.org/10.51291/2377-7478.1030>
- [35] Rose, J. D. (2002). “The neurobehavioral nature of fishes and the question of awareness and pain”, *Reviews in Fisheries Science*, 10, pp. 1–38.
- [36] Segundo-Ortin, M. & Calvo, P. (2023). “Plant sentience? Between romanticism and denial: Science”, *Animal Sentience*, 33(1). <https://doi.org/10.51291/2377-7478.1772>
- [37] Seth, A. K. (2016). “Why fish pain cannot and should not be ruled out”, *Animal Sentience*, 3(14).
<https://doi.org/10.51291/2377-7478.1038>
- [38] Simon, J. (2020). “Review of Carruthers, Human and Animal Minds: The Consciousness Questions Laid to Rest”, *Notre Dame Philosophical Reviews*.
<https://ndpr.nd.edu/reviews/human-and-animal-minds-the-consciousness-questions-laid-to-rest/>
- [39] Sneddon, L. U. (2011). “Pain perception in fish: Evidence and implications for the use of fish”,

Journal of Consciousness Studies, 18(9–10), pp. 209–229.

- [40] Sneddon, L. U., Braithwaite, V. A., & Gentle, M. J. (2003). “Do fishes have nociceptors? Evidence for the evolution of a vertebrate sensory system”, *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, 270(1520), pp. 1115–1121.
- [41] Tye, M. (2017). *Tense Bees and Shell-Shocked Crabs: Are Animals Conscious?*, Oxford: Oxford University Press.

著者情報

佐々木健人(無所属 sskssk0242@gmail.com)